

ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

秋田県 大潟村社会福祉協議会 事務局次長

いけだ まさひろ

池田 昌弘さん



【夏祭りを軸に多世代が交流する、活気あふれる福祉教育】

大潟村社会福祉協議会（以下、村社協）では、福祉教育で高齢者の疑似体験をした子どもたちから「かわいそう」などの感想が多く聞かれる点に課題を感じていました。同時に、高齢になってもできることが数多くあり、ともに支え合っていることに気づける福祉教育を実践したいと思っていました。

そこで池田さんは2022年度、子どもから子育て世代、高齢者までが交流できる場として「夏祭り」の開催を考えました。まず取り組んだのは、祭りの目的が多世代交流であることを村社協内に丁寧に説明することでした。すると、職員が集客のアイデア出しや村内のボランティア団体への声がけを積極的に行ってくれたそうです。「私の思いを押しつけず、緩やかに皆

を巻き込むことを心がけました。おかげで協力してくださる人（団体）の裾野が広がりました」と池田さんは語ります。

夏祭りの会場は高齢者が集まる「ふれあい健康館」とし、また、村内に寮がある秋田県立大学の学生にも呼びかけて竿燈の演技や体験会を開く協力を得ました。当日は、子どもたちとその親、大学生、高齢者が大いに交流できるように環境づくりを工夫しました。出店の店番を小学生と高齢者で組んだり、工作コーナーでは高齢者から子どもたちにぬり絵を教える場面が見られたり、祭りのフィナーレを飾った盆踊りでは、高齢者が大学生に踊りを教えるなど、まさに世代を超えたコミュニケーションがあちらこちらで見られたそうです。子どもたちか

らは「おじいちゃんやおばあちゃんは、僕たちの知らないことをたくさん知っているんだね」とうれしい感想が聞かれたそうです。池田さんは「世代の枠を超えて交流をもち、さまざまな人がいるのだと知ることができたうえ、役割もいろいろあることに気づけたことがよかったです」と振り返ります。

夏祭り後は、40～50代の母親グループが、高齢者を対象とした食事会のボランティアに参加するなど広がりも見られます。「親世代にも住民同士の支え合いが大切という意識が育っていることも大きいです」と池田さんは語ります。

さまざまな発見とつながりを生む夏祭りは、2024年度も村社協の大重要な事業として開催される予定です。

Contents

P.2▶ 特集 改めて考える「社協ボランティアセンター」

P.6▶ わたしにとってのボランティア P.7▶ キーパーソンから学ぼう！

P.8▶ 災害ソ・ノ・ト・キ！ | インフォメーション

改めて考える「社協ボランティアセンター」

全社協で「社協VC強化方策2023」を策定したことを機に、社協VCの機能や役割を考える場として社協活動全国会議の分科会を開催しました。

本特集では、企業やNPO、マスメディアの立場から見た社協および社協VCはどのように映っているのか、そして社協VCに求める役割と機能、社協への期待を紹介します。

参加者



コーディネーター

シンポジスト

●日本福祉大学 学長 原田 正樹さん

●新潟県・新潟市社会福祉協議会 地域福祉課 地域福祉係 主査 渡邊 雅弘さん

●ふくおかNPOセンター 代表 古賀 桃子さん

●NEC 経営企画部門コーポレートコミュニケーション部プロフェッショナル
池田 俊一さん

●日本フィランソロピー協会 シニアマネージャー/
NEC プロボノ俱楽部 顧問/Nボノ 代表理事 川本 文人さん

●フリージャーナリスト 町永 俊雄さん

社協VC強化方策2023について

概要と策定に寄せる想い

原田 この分科会では、なぜ社協にボランティアセンター（以下、VC）があるのか、なぜ社協にVCが必要とされているのかなどについて考えていきます。

この3年間は、コロナ禍の影響でボランティア活動にさまざまな影響がありました。そのなかで活動が変化したり、新しい取り組みが生まれたりしました。「社協VC強化方策2023（以下、強化方策）」は、そのような状況も踏まえながら策定したものです。策定にあたり、語られる内容が市町村社協の現場とギャップがあってはいけませんので、各方面にアンケートやインタビューを行いました。すると、非常に厳しい現実が見えてきました。例えば「社協には常設のVCがあるか」との問い合わせに対し、2割が「ない」と回答しています。また、看板はあるものの専任の職員がないVCが75%も存在しています。さらに、VC単独の年間事業費も100万円未満

が4割となっています。こうした厳しい状況のなかで、社協VCの理念や方向性をどう実現できるのか。そのような問題意識を起点とし、強化方策の検討が始まりました。強化方策で整理した内容は、「社協VCの取り組みを実現するための7つのポイント」「社協VCの5つの基本的な役割と社協VCの志向性」「社協VCの5つの運営パターン」など多岐にわたります。ぜひ皆さんの職場で活用していただければ幸いです。

社協から見た社協VC

社協におけるVCの役割と課題

渡邊 社協におけるVCの意義は、次の3つがあると考えています。

①ボランティア活動を通じて人が集う意義 ②VCの名称がある意義 ③ボランティアの活動原則という意義

ボランティアの楽しさについて聞くと、多くの人が「友達や仲間ができた」「知識や情報を得られた」などと語ります。社協がVCを運営していることで住民が集い、地域で楽しく過ごせること

につながっています。また、「ボランティア」という名称は、「社協」の名称よりも、役割や機能を想像してもらいややすいというメリットもあります。

一方、市町村社協のVCの課題は次の3つがあります。

①VCの現在地の再確認

人員体制や財政的な裏付けがないなかで、VCの実態と期待される役割にギャップが生じています。

②VCを巡る状況（現状認識）

環境や制度など、VCを取り巻く状況が変化してきています。

③期待と現状とのギャップの生起

期待されていることと現場のボランティアコーディネーターとの間に、認識の差があるのではないかと思います。

これらの課題を解決するためにも、本分科会で社協VCと関わりが深い4名の方々によるお話を楽しみにしていました。社協への期待を受け止め、これからどうしていくのかを、皆さんとともに考えていきたいと思います。

NPOから見た社協VC

攻めのプラットフォームづくりに期待

古賀 当法人では、ここ十数年、NPOと企業・行政をつなぐコーディネートに注力しています。社協とのつながりも深く、平時はサロン活動や福祉教育のプラッシュアップのお手伝い、研修会における協働・連携、企画立案のサポートなどをしています。災害時は、社協や行政、NPOなどの団体が連携するための支援や、ヒト・モノに関わる後方支援を行っています。こうして協働するなかで、社協について素晴らしいと感じる点は次の3つです。

- ①社会からの信頼度が高い ②地域との密着度が強い ③横連携が広域的で積極的

これらはNPOから見ると、物心両面に恵まれ非常にうらやましく感じられる点です。それを踏まえ、社協には「攻め」の姿勢でのプラットフォームづくりを期待しています。ここで求められる意識として次の3つをあげます。

- ①地域福祉の推進役として多様な領域と関わりをもつ ②中間支援として資源の集約や情報提供、個別仲介を行う ③ロールモデルとして次世代に憧れられる存在になる

①と②については、「社協」という社会的に信頼度の高い看板を武器として活用し、果敢に挑戦していただきたいと思います。③は、私が教える3つの大学の学生の意見を踏まえたものです。ぜひ、専門性ある職能としての誇りをもつとともに、働き方やファッショなどからも、次世代に憧れてくれる存在になっていただきたいと思います。



原田氏

企業から見た社協VC

企業が社協と連携するメリットとは

池田 弊社は2020年に「NEC Way」という経営理念を整理し、そのなかで掲げた「パーカス（存在意義）」に基づき、人々の「環境」「社会」「暮らし」を守り、支え、育むことによる社会価値の創造をめざしています。その具体的な取り組みのひとつが「プロボノ」です。弊社がプロボノに取り組み始めたのは2010年のこと、国内企業としては初の試みでした。その後、東京ボランティア・市民活動センターと包括連携協定を締結し、川崎市社協とはパートナーシップ協定を締結しました。

こうした活動に取り組む弊社から見た企業が社協と連携するメリットには、次の3つがあると考えています。

- ①幅広いステークホルダーとの対話・共創が可能になる

企業はNPOなどの団体とあまり接点がないため、社協と連携することで多様な団体とつながることができます。

- ②社協によるスクリーニングを経ることで、各団体と協働しやすくなる

社協は社内で理解されやすい存在なので、社協を通すことで各団体との協働もしやすくなります。

- ③多様な地域・社会課題のニーズのくみ取りができ、事業とのシナジーが期待できる

社協と綿密に連携していくべきは、社会課題をしっかりと把握でき、ピントの合った支援を提案することができます。

企業は社協に対し、より多くのプロボノの場を提供していただきたいと期待していますし、さまざまなステークホルダーを巻き込んで政策提言も一緒にできると考えています。ぜひ、各地域で社協と企業との連携を深めていただけたらと思います。

プロボノの活用とボランティアの活性化

川本 NECでは、2020年にプロボノ

を行う社員のグループ「NEC プロボノ俱楽部」が発足しました。現在、約550名がメンバーとして参加しており、自主的に地域活動に取り組んでいます。活動コンセプトに「自分に、仕事に、活かせる・つなげるプロボノ」「楽しくなれりや、プロボノ・ボランティアじゃない」を掲げ、約3年間で80ほどのテーマの社会課題を解決してきました。成功のポイントは、社協と連携し、併走しながら支援先を見守っていることです。プロボノ俱楽部では、社協と次のようなシナリオで連携しています。

- ①プロボノ支援先の洗い出し ②プロボノ適用の事前検討 ③支援先面談 ④プロボノチーム編成（活動シナリオの検討／活動告知〈社内公募〉／ワーカーマッチング／チーム結成） ⑤支援先との活動キックオフ ⑥活動併走ナビゲーション

全国の社協の皆さんにも、こうしたシナリオを参考に、プロボノの活用に取り組んでいただきたいと思います。その際、プロボノで活動できる範囲を社協も支援先も正しく理解していただくことが重要となります。

また、日本フィランソロピー協会では、全国規模で人と企業の社会貢献を支援しています。最近、さまざまな団体のボランティア情報を提供し、直接申し込みができる協会独自のボランティアマッチングサイト「ボランティアウェブ」をスタートしました。協会としては、企業や社員を社協やNPOなどの団体、地域課題につなぐプラットフォーマーになりたいとの願いを込めて活動していますので、このボランティアウェブの認知度をもっと上げていきたいと思っています。



渡邊氏

（公財）ノエビアグリーン財団「2023年度助成事業対象者募集」（団体・個人）（2024年2月29日締切）

助成金情報

児童・青少年の健全育成の向上を目的とした体験活動、およびスポーツの振興に関する事業を積極的に行い、または奨励している団体、将来世界大会やオリンピック、パラリンピック出場等を目指すアマチュアスポーツ選手（18歳以下）への助成。（詳細は「ノエビアグリーン財団」で検索）

「私」から積み上げていく未来

町永 私は、強化方策に「この社会を何とかしたい」との思いを読み取りました。つながりからこぼれ落ちた人に手を差し伸べようとする熱い志を感じました。もし、私が強化方策を番組化するなら、そのように社会に伝えます。一方、福祉教育で「あなたのまちでやさしさをひろげるために」という言葉が使われていますが、これを番組タイトルとして提案しても、たぶん、すぐに却下されるでしょう。使い古した言葉で、情報力や情報量がありません。もちろん、この言葉が使われ始めた当初は切実な思いがあったに違いありません。しかし、現代社会は荒れ果てていて、この言葉から具体的に喚起できるイメージがないのです。今の社会ではもっとエッジの効いた言葉を使ったほうがいい。この社会において、やさしさや思いやりは、ともすれば強者が与える慈悲と恩恵で、小さな声や見えづらい存在には届きません。私たちは福祉の言葉について、もう一度根底からとらえ直さなければなりません。「やさしさが必要だ」と思った時、その原初の気持ちがこの社会で通じるかどうか。そのことを語り合わなければ福祉は動きません。

超少子高齢社会は、すぐ目の前の未來の話です。多くの人が不安とおびえを感じていますが、私たちはそこに希望の社会をつくるなければなりません。そんな時、私がボランティアに対して特に未来と可能性を感じるのが、全社協発行の『ボランティア情報』です。何がよいかというと、記事の主語が「私」になっている点です。「私」という主語



古賀氏

で地域を語り、他者を語っている。私たち一人ひとりがこの社会をどう考えるのか、何ができるのか。そして、何がつらいのか、何に涙を流すのか。一人ひとりの「私」から始まる社会というものを語っています。そういう「私」の声から積み上げていくのがボランティア社会であり、私たちの未来です。それは「私はひとりでいたい」という声さえも認める社会です。あなたはあなたのままでいい。あなたはここにいていい。つまり、人間の存在を丸ごと認めることから、ボランティア社会は始まるのだ、と私は思います。

質疑応答

参加者からシンポジストへの質問

【Q】サロン活動のブラッシュアップで工夫していることは？

[A] 古賀 より多くの人の参加を促す工夫として、それぞれの世代に応じてキャッチャーなコンテンツをサロン活動の要素に取り入れるという方法があります。例えば団塊の世代なら、若い頃はジャズや映画を楽しんでいたとか、喫茶店文化が広がった時代なのでコーヒーをたしなんでいた方が多い傾向があります。そうしたコンテンツをサロン活動に少し盛るだけでもずいぶん参加者が変わってきた事例があります。また、広報の仕方も重要です。若い人はほぼチラシを見ませんし、SNSについても、フェイスブックよりインスタグラムやXを利用します。世代によって情報を取得するツールが違うので、この点も見直す必要があります。

【Q】社員によるプロボノは、就業時間内に行っている？

[A] 川本 NECでは働き方改革のなかで、上司が承認すれば就業時間内でもプロボノや大学の勉強、育児や介護などを行ってもよいという制度があります。これがプロボノ倶楽部が急速に

発展したひとつの要因だと思います。最近は、大企業を中心に就業時間の何割かを社会貢献に充てることを推奨する動きがみられるようになっています。その最先端はアメリカで、グーグル本社では全従業員の就業時間の2割を社会貢献に充てることとしています。日本でも経団連を中心に金融機関をはじめとする大企業で同じような取り組みが進んでいます。こうした時代の趨勢もあり、企業によっては社員をどのように社会貢献に参加させようかと腐心しているところもありますので、社協VCとうまくマッチングできると非常に効果的な活動ができると思います。

【Q】社協が企業と接点をもつには？

[A] 池田 まず、地域を見渡してみて、企業の事業所とつながることがひとつのポイントだと思います。現時点で接点がなくても、直接、企業にお声がけいただければ、何かが生まれる可能性はあると思います。また、災害が企業と社協をつなぐきっかけになることもあります。実際、弊社は東日本大震災の時に東北地方の多くの社協と協働しましたし、川崎市社協とも令和元年台風19号発生時に弊社からお声がけし、連携しました。

【Q】エッジの効いた言葉や、住民に届きやすい言葉を生み出すには？

[A] 町永 言葉をどう生み出すかについて、マニュアルはありません。私自身、試してうまくいかなかったことも多く経験してきました。その蓄積量がエッジの効いた言葉を生み出す土壌になると思いますので、まずは失敗を避けないことが大切です。ただ、福祉でよ



池田氏

「地域こども支援ネットワーク事業」・「広がれボランティアの輪」連絡会議共催シンポジウム(2024年2月3日)

大阪市社会福祉協議会「地域こども支援ネットワーク事業」は、「広がれボランティアの輪」連絡会議とともに、シンポジウム「こどもや若者と取り組む災害にも強い福祉のまちづくり～ボランティアの存在価値や力を、大阪から全国に発信するで～」を開催。(詳細は「大阪 地域子ども支援ネットワーク事業」で検索)

く使われる「共生社会とは」という言葉で語り始めると、話し手の感覚と遠い話になります。そこで、「私は」という主語から始める。「私は」この社会をどう考えているのか、というところから始めると、話し手のなかにある力が表現されやすくなります。一方で、地域によって「思いやりのある社会」などの言葉を、素晴らしいと受け止める特性があるのなら、それはそれで構わないのです。しかし、その言葉では埋没すると感じたら、なぜそう感じたのかを自分のなかで探し当て、次の行動につなげる。それが自らの福祉力を高めていくことになるのではないかと思います。

【Q】社協VCの活動の成果を見る化するには?

【A】渡邊 私が大事にしているのは、活動のなかでの出来事を社協職員が言葉にして語ることです。しかし、例えば現場の参加者の目が輝いていたことを成果として伝えるのはなかなか難しいものです。そこで、社協職員が語るのと併せ、いろいろな人に参加してもらうことが有効だと考えています。やはり現場で体験していただくというのは、成果の見せ方としてはとても効果的ではないかと思います。

社協VCへの期待

これからの社協VCに求めること

池田 最近、課題解決型をパーソナルに掲げる企業が増えているので、地域活動やボランティアに参加することを求めている企業は多いと思います。その時、企業が社協を知っていれば社協にお声がけする可能性が高くなるので、



川本氏

まずは企業に社協を知らせるためのPRが必要です。つながりができるなら、ぜひ社協がハブとなり、企業と地域が双赢になるようなマッチングをしていただけたらと思います。

川本 川崎市社協とNECは定期的に情報交換を行い、そのなかで弊社の思いや願いを伝えています。皆さんも企業との情報交換を通して、その企業がどのような期待をしているのかについて、企業の立場になって知りたいことが重要だと思います。また、地域にどのような課題があり、どのような支援が必要かを整理し、支援先との関係をうまく取りもつていただくことが、企業側が安心してプロボノに参画できるポイントとなります。

町永 コロナ禍が明け、地域が動き始めています。過疎地でも皆さん生き生きと私の話を聞いてくださいます。その様子から、困難を乗り越え、地域を回復させることができるとの手応えを感じました。私は今回、東京の会議室でお話ししましたが、全国の社協にはもっと個別の地域課題があり、私の話がまったく通用しない現実もあるはずです。そのことをまた私に教えていただき、語り合いたいと思います。地域の声を聞いて社協は変わっていきます。同時に、社協はこの社会を変えなければなりません。東京の大きな組織のもとでは、社会を前提として福祉や社協活動を考えがちです。そうではなく、この変えていくべき社会について、地域の社協から発信していくべき時が来ているのではないかと感じています。

古賀 NPOでは行き届かない部分について、社協に高めていただきたい3つの力を期待してお伝えします。ひとつは「つながる力」です。SNSでつながってもこだわりや人となりまでは理解できませんので、直接つながることがとても大切です。ふたつめは、営業力を含めた「知らせる力」です。社協のことや地域の実情を多くの人に知らせることが必要です。3つめが「コーディネートする力」です。活動に参加した人に、楽しい、よかったなど、少しでも成功体験や達成感を感じ

てもらえることが大切です。これらの力は社協VCだからこそ高められるものですから、期待として皆さんにお願いしたいと思います。

まとめ

シンポジストの意見を踏まえて

渡邊 古賀さんからは、社協には社会的な信頼や横の連携があるとのお話をありました。これは社協の先輩方が積み重ねてきたものが礎になっています。私たちは、これを「守り」ではなく「攻め」の姿勢で大事にしていかなければならないと感じました。池田さんと川本さんからは、企業側もプロボノの場を求めており、連携する際は相互理解が大切であることを教えていただきました。町永さんからは、「私」を主語にすることの大切さを学ばせていただきました。私たちが地域にボランティア活動を呼びかけるとき、「私」という主語を見失ってはいけない。私たちはどう暮らしたいのか、私たちはどう生きたいのかを大切にしながら、その方たちの思いと一緒に歩んでいくことの大切さを感じました。

原田 この分科会でのお話を踏まえ、ぜひ各自の社協で、社協や社協VCについて議論していただきたいと思います。その際、「VCは大事だ」だけではなく、それぞれの市町村社協のなかでVCをどう位置付け、どのようなかたちで事業展開していくのかについて考えていただきたいと思います。それが、新しい社会や新しい福祉をつくるフロントランナーとしての、社協VCの価値や意義を見つめ直すきっかけになるのだと感じています。



町永氏

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会(JVCC2024) (2024年2月23日・24日)

イベント情報

今回のテーマは、「違いをチカラに、多様性を地域の当たり前に～あつまれ！ つながれ！ 課題に向き合うコーディネーター～」。「越境×対話×共創」の理念をベースに、さまざまな分野で活躍する人たちが、それぞれの知識や経験をもち寄ることにより、「参加と協働」をさらにすすめる機会とする。(詳細は「コーディネーション研究集会」で検索)

わたしにとてのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



代表
北海道大学医学部2年
かわべるか
河辺 琉雅さん

北海道 第10回 生活支援ボランティア団体 まごのて

団体紹介

2020年4月に北海道大学の学生により設立された、生活支援サービスを行う団体。主に札幌市東区において地域の高齢者等を対象に、日常の小さな困りごとに対応する。周辺の他大学の学生も含め、約30名がスタッフとして在籍する。

かゆいところに手が届く支援と、孫のような身近さで、大学生ならではの地域福祉を実現

「まごのて」の活動に参加したきっかけは?

私は大学入学を機に、故郷の茨城県を離れ、札幌市で暮らしています。ボランティアの経験や知識はありませんでしたが、理学療法士をめざしており、いろいろな立場や状況の人の思いや生活背景を知ることが、自分の糧になるという意識をもっていました。大学生になったら、高齢の方や障害のある方と関わる経験がしたいと思っていたので、「まごのて」の存在を知ってすぐに「これだ!」と直感し、活動に参加するようになりました。

「まごのて」は買い物の付き添い、窓拭き、庭作業、スマホ操作のサポートといったサービスの提供を通して、地域支援を行っています。私の初めての活動は、PCのバックアップを取りたいという高齢の女性からの依頼で、見習い役と



地域の高齢者から依頼を受け、自宅の掃除を手伝うまごのてメンバー

して先輩に同行しました。結局バックアップはうまくいかなかったのですが、それでも「来てくれてたすかったよ」と感謝の言葉をいただき、「ボランティアってこんなに感謝されるんだ」とうれしくなりました。

団体を運営する立場になって感じたことは?

私はカラオケ店でアルバイトをしていて、そこでもお礼の言葉をもらうことはありますが、お互いに気持ちが通じ合う体験は、ボランティアでしか得られない醍醐味です。ふだん接する機会が少ない高齢者と身近にふれあえるのも、大きな魅力です。依頼者と接する時には、堅苦しくならず、でも失礼にならない程度にフレンドリーな応対を心がけています。いろいろなことに挑戦できるのも楽しみのひとつです。冬になると雪かきの依頼が増えるのですが、私も含めスタッフの多くは道外出身なので、依頼者から除雪の仕組みなどを教わることもあります。

昨年11月に、団体の代表に就任しました。依頼を待つだけでなく、地域のニーズを掘り起こせる団体に成長させたいという気持ちがありますが、大学生という本分がある以上、一人ひとりが活動に割ける時間は多くないうえ、メンバーは流

動的で、できることは限られます。代表として日々やりがいを感じている反面、団体運営の難しさを痛感しています。

専門機関の知見をどのように利用している?

団体発足時から、札幌市東区社会福祉協議会の協力を仰いでいます。実施した活動や問い合わせの内容を定期的に報告したり、車いす、認知症、傾聴、高齢者の特性など、活動に必要な知識を学ぶ講習会を開催していただいている。欲張らずに、その時々のメンバーでできる範囲で続けることが、結果的に団体の存続につながることも教えていただきました。私たちが想定していなかった視点からアドバイスをいただくことが多く、この連携があるおかげで、大きなトラブルもなく活動が続けられています。

社協VCが若者とつながるには?

大学の講座でボランティアについてお話しする機会がありますが、VCの存在を知らない方が多く、こちらの周知不足を感じます。学校や各団体とつながりをもてる機会を作っていくことで、VCの存在や活動に関する相談先があることを知っていただけるのではないかと思います。若者と一緒に考え取り組む姿勢を大切にしていきたいと思います。

札幌市社会福祉協議会 VC 鈴木 はるかさん

東京ボランティア・市民活動センター「市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO 2024」(2024年2月9日・10日・11日)

イベント情報

今回で20回目を迎える今年のテーマは「希望ある未来をつくる」。私たちの暮らしに関わるさまざまな社会問題に焦点をあて、私たち市民にできることを考えるイベント。3日間にわたり、さまざまな社会問題に焦点をあてた20の分科会を開催する。(詳細は「ボランタリーフォーラム」で検索)

キーパーソンから 学ぼう!



お互いにつながる はじめの一歩

人と人とのネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さんもはじめの一歩を踏み出しましょう！

始まりは、障害のある子どもが 安心して遊べる場所を作りたいとの思いです

私は北海道出身で、1972年に上京し、荒川区立保育園に保育士として就職しました。そこは障害の有無にかかわらず、子どもと一緒に保育する施設で、今でこそインクルーシブ教育といわれますが、当時としては数少ないものでした。その保育園で出会った障害のある子どもをもつ親の会「荒川のぞみの会」の学童クラブにスタッフとして参加するなかで、「おもちゃ図書館(トイライブラリー)」の活動を知りました。これは、障害のある子どもたちが、自由にいろいろなおもちゃで遊ぶことができるボランティア活動です。当時、障害のある子どもや、その親が周りを気にせず安心して遊べる場所はほとんどありませんでした。早速お母さんたちと一緒に「荒川おもちゃ図書館」を立ち上げました。

それまで、おもちゃにあまり興味を示さなかった子どもがたくさんのおもちゃ



鈴木さんが荒川区の市民団体と作成した「あらかわしあわせすごろく」を皆で楽しむ

にふれ、自分なりの遊び方を見つけて楽しみ成長する姿は、私たちに大きな学びを与えてくれました。そして、リラックスして遊んだりおしゃべりをするなかで、つながりが生まれることの大切さも実感しました。

時代を経て、 さまざまな人がつながる ユニバーサルステーションに

立ち上げから4年後、おもちゃ図書館は荒川区社協の常設施設として運営していただくことになりました。私自身も社協職員となり、おもちゃ図書館をはじめ、重度障害者施設「あらかわ希望の家」、子ども食堂や居場所活動の「あらかわ子ども応援ネットワーク」の立ち上げ支援を行ってきました。退職後の現在は、おもちゃの図書館全国連絡会の理事長としての活動や、不登校など生きづらさをかかえる子どもたちとともに多世代の人々が集うみんなの居場所「子ども村ホッピングステーション」の活動に参加しています。

おもちゃ図書館は、障害のある子もな



おもちゃの図書館全国連絡会で、全国から集まった会員とネットワーク会議を実施

第10回

おもちゃを介して集い、 交流する場から地域課題の 解決の場へ



東京都

NPO法人 おもちゃの図書館全国連絡会

理事長

すずきことこ
鈴木 訪子さん

東京都荒川区立保育園で統合保育を担当。退職後、荒川おもちゃ図書館を設立。1986年、同施設が荒川区社協の運営となり、自身も社協職員に。退職後も地域福祉活動に従事するとともに、おもちゃの図書館全国連絡会の活動に取り組む。

い子も一緒に遊び、交流し、育ちあう場となっています。おもちゃを介してさまざまな人がふれあいつながりあう場として、この活動は全国338か所に広がっています。また、最近ではおもちゃ図書館と子ども食堂がコラボした活動も増えています。私もボードゲームのライブラリーを開催し、遊びながら地域福祉のことが学べるすがろく作りを行っています。

「他人ごと」ではなく「自分ごと」 私自身が楽しむことが 活動の源です

近年、特にコロナ禍以降は地域におけるつながりの希薄化が深刻となっています。だからこそ、話を聞いてもらえる場所、隣の人の困りごとに気づける場所があることが重要ではないでしょうか。これまでの活動においても、大切にしてきたのは、まず話を聞くこと。そして否定せずに受け入れ、「一緒に考えましょう」という気持ちで伴走し続けることです。自立を促す際に大事なことは、困った時にヘルプを出せる力です。いつでも気兼ねなく相談できるよう常にドアをオープンにしておく姿勢と、そのための場所作りを心がけています。地域の課題を他人ごとではなく自分ごととしてとらえ、今後も私自身が楽しみながら、誰にとっても居心地のいい場所を地域に増やしていくたいと思います。

書籍紹介

『月刊福祉』2024年2月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「第3者の視点を入れる、利用者の声を聞く」。提供する福祉サービスの質の向上を図ること、第3者の視点を入れることの重要性を確認し、事業者がそれを継続的に取り組むためのヒントを提供する。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

第10回 静岡県 热海市社会福祉協議会

多くの支援を受け入れ、 頼ることが諦めず進む力に

熱海市で発生した災害に対する 市社協の対応

2021年7月3日、熱海市伊豆山地区で大規模な土砂災害が発生しました。死者27名、行方不明者1名、住宅被害98棟に及ぶ被害となりました。またいつ土砂が流れてくるかわからず、災害現場までの道路も2本埋まってしまったため、すぐに被災状況を確認することはできませんでした。2日後には災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を開設しボランティアの募集を始めましたが、実際に活動を開始できたのは、現場の安全が確保できた7月21日からでした。



災害VCのボランティア受付所

青年会議所（以下、JC）に声掛けし さまざまな場面で支援を受ける

こうしたなか、発災当初から頼りにしたのが青年会議所（以下、JC）です。日頃から事業などでつながっていたわけではありませんが、人脈をたどってこちらから声掛けをしました。JCの方々が早い段階から避難所や配給場所に張り付き、ニーズや課題の収集をしてくださったので非常にたすかりました。さらに、資機材の提供や弁当の配達、夜間には自発的にパトロールまでしてくださいました。地域の企業による活動なので、住民も安心して支援を受けられたと思います。JCとはこれを機に協定を結んだので、有事の際のスムーズな連携につなげていきたいと思います。

NPOの受け入れの窓口は 経験豊かなアドバイザーに一任

現場でどのようなボランティアが必要なのかという

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。



熱海市社会福祉協議会
地域福祉係長
はら なるあき
原 盛輝さん

ニーズを、丁寧に拾い上げてくださったのはNPOの方々でした。活動の経験だけでなく法律の知識もおもちで、行政や事業者と率先してやり取りしてくださり頼もしい限りでした。しかし、私たち熱海市社協はこれまで災害支援のNPOとあまり関わりがなかったので、初対面の団体をどこまで信じてよいのかとの不安もありました。その際、私たちとNPOの間に入ってきたのが、災害対応NPO「MFP」代表の松山文紀さんです。以前、静岡県社協主催の災害ボランティアコーディネーター養成講座に講師として来られたことがあり、面識があったので、松山さんとコミュニケーションが取れているNPOは安心だと判断することができました。

平時からつながりのある地域の自動車学校が 送迎バスを運行

2本の生活道路に土砂が流出したことで、ふだんその道路を利用していた住民が、通院や予防接種などに行けないという困りごとが生じていました。そこで発災から約1週間後、被災を免れた道路で送迎バスを運行してくださったのが、平時の事業として高齢者の移動支援に関わる相談をしていた自動車教習所の（株）マジオネットです。同社は、車両の提供と運転手の配置だけでなく、スーパーなどの要所を回る運行表の作成・配布もしてくださいました。また、災害VC開設後にはボランティアの送迎も手伝っていただきました。

発災当初はどうしたらよいのかと目の前が真っ暗でしたが、多くの方が一步先、二歩先を照らしてくださったからこそ、諦めずに進んでこられたのだと思っています。



ボランティアによる泥かきの様子



【インフォメーション】勉強会をハイブリッド形式により開催します！（「広がれボランティアの輪」連絡会議）

ボランティア・市民活動をすすめる皆さんとともに学び合う場「勉強会」を開催します。今年度のテーマは「居心地の良い居場所づくり～ゆるやかなつながりをめざして～」（仮）です。ぜひご参加ください。

【日程】 2024年3月8日（金）13：30～16：30

【会場】 全社協会議室（東京都千代田区）/Zoom会議室

詳細・申込は、「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページでご案内します。

「広がれボランティアの輪」で検索 <https://www.hirogare.net/>